

# きたかる移住計画フォーラムにおける パネルディスカッションの記録

鶴 理恵子

## Minutes of the Panel Discussion at the Forum to Facilitate Migration to the Kitakaru Area

Rieko TSURU

### はじめに

2016年8月27日（土）、群馬県長野原町と上毛新聞社の共催で、北軽井沢小学校体育館にて「北軽井沢移住フォーラム」が行われた。テーマは「北軽井沢移住計画」で、その趣旨は「長野原町北軽井沢は、首都圏から車や鉄道で2時間半の場所にあり、近くて便利な高原リゾート地である。本フォーラムは『北軽井沢・応桑地域に移住するには』という点に的を絞り、仕事や趣味などのさまざまなライフスタイルの提案と、新たな地域の魅力を再発見し地域への「誇りと愛着」の醸成につなげる」（「フォーラム企画書」より）とある。

会場では、写真展「森二入ル」（写真家 田淵三菜）、北軽井沢マルシェ（野菜等、地域にちなんだもの等の販売）、アトラクション（早稲田グリーンクラブOBによるコーラス、地元シンガーソングライター山人（やまんちゅ）による演奏と歌）が行われた。

13：00～13：50、プロブロガーのイケダハヤト氏による基調講演（「まだ東京で消耗してるの？ 家族で限界集落に移住してわかった10のこと」）の後、14：00～15：30まで「北軽井沢移住計画」をテーマにイケダ氏も含めた7名のパネラーによるパネルディスカッションが行われた。コーディネーターは、上毛新聞社編集局長関口雅弘で、事前に大まかな進行予定メモが渡され、当日はほぼその予定表に沿って進行された。北軽井沢への移住について、学識経験者、移住経験者、地元住民それぞれの視点から見た北軽井沢の魅力や欠点、ライフスタイルなどを参考にして、「北軽井沢移住計画」を考えるという趣旨であった。

本稿はそのパネルディスカッションの記録である。筆者は、跡見学園女子大学からパネリストの一人として出席した。長野原町と上毛新聞社のご厚意により音源をいただき、鶴がテープ起こしをした。掲載については関係者のみなさまの許可を得ている。

### 1. パネルディスカッションの参加者

#### コーディネーター

関口 雅弘（上毛新聞社編集局長）

#### パネラー

- ①イケダハヤト（プロブロガー）：基調講演から引き続き
- ②鶴 理恵子（跡見学園教授 社会学博士）：鳥取や島根の移住を研究
- ③萩原 睦男（町長・行政代表）：町の移住定住方針や施策の発信
- ④藤野 麻子（移住者）：農業、カフェ、本屋等による移住生活の実践
- ⑤隈上 雅志（移住者）：プレジデントリゾートの営業支配人、旅行会社でツアーコンダクター等の経験も有り
- ⑥山崎 聡（地元住民・野菜農家）：長野原町生まれ育ち、30代の農業経営者。シンガーソングライター

⑦星野 美紀（地元住民・酪農業者）：長野原町生まれ育ち、40代の農家女性、子育てと自家の農業経営の両立。

## 2. きたかる移住計画フォーラムテープ起こしの内容

司会：皆様、たいへんお待たせしました。これより、パネルディスカッションを行います。テーマは、きたかる移住計画です。学識経験者や移住経験者、地元住民の方をパネリストとしてお招きいたしました。

先ほど基調講演をいただいた、イケダハヤト様にもパネリストを務めていただきます。コーディネーターは、上毛新聞社の関口雅弘編集局長です。それでは、皆様よろしくお願いたします。

コーディネーター関口：え、それではこれから、パネルディスカッションを始めます。イケダさん、講演ありがとうございました。あの、24日にこちらへいらしたばかりですよ、私なにげにこの、「まち・ひと・しごと総合戦略」ですか、これを見たら、もうこの辺の所、押さえてらっしゃって、何という人だろうと感銘を受けました。また色々、お話しかがえたらと思います。

え、でこのパネルディスカッションは、ほか町のオールスターと言っていいんでしょうかね、ま、町外からも研究者を迎えて、長野原町、きたかるの移住推進ということについて、みんなでワイワイ、ガヤガヤお話をしましょう、という時間です。えー、90分ということではほんとに一家言ある方々ですから、90分だと厳しいのかなというまあ、前半はそれぞれいろんなお立場の方から。おおい、ご発言の際に自己紹介していただきながら、お話ししていただくんですけども、全体的には前段はこの北軽、あるいは長野原に住んでいての感想なり、あるいはもっとこうしたらよくなるんじゃないかという、思っていることを素朴にうかがいたいなあと思います。それから後半は、せっかく町長もいらっしゃっているの、町の今後のあり方への要望とかね、色々、政策的なことも含めて、みなさん、それぞれ活発にご意見うかがえたらなという風に思っております。えー、それではだんだん、お話しかがっていきたくんですけど、こちらの中に、まず一番私のとこにお近くお座りいただいているのが、跡見学園女子大学の鶴教授、鶴理恵子さんです。今日はですね、お住まいは埼玉、ですかね、あの、お越しいただきました。えー、専門は農村社会学、農村社会学が専門ということでまさにこの移住ということ、あるいはこの地域での暮らしについては長く研究されている、主に西日本の方でこれまで研究をされてきたという風にうかがっております。

まず、鶴教授に、今までの研究、その農村社会学はどんなことなのか、あるいはその観点から見てこの長野原町、北軽について、何か思うところ、何かメッセージがあったら、まず総論的におうかがいしたいと思います。よろしくお願いたします。

鶴：みなさん、こんにちは、ただいまご紹介いただきました、鶴理恵子と申します。鶴というのは旧姓を使っているのですが、私は九州の、福岡の出身です。福岡では鶴という苗字はあまり珍しくなかったのですが、高校卒業して、大学行って、そこから広い世界で暮らすようになって、鶴というのが結構珍しいんだなあということが分かりました。ずっと西日本を中心にまあ、勉強し、研究を続けてきたのですが、跡見学園女子大学の観光コミュニティ学部というのが昨年度でできて、できた時に単身赴任で来ています。私の夫は、夫も社会学者で島根でやっぱり社会学をやっております。で、子どもたち二人は京都で大学生をしているのですが、ということで私たち4人家族はみんなバラバラに住んでいて、年に何回か、お盆とか色んな時に集まって、あるいはふだん、連絡は取りあっていますけど、そういう形で今、暮らしています。

私自身は、今日お話しする、最初にご紹介するのは島根県と鳥取県で研究をしてきたことの話です。先ほどイケダさんの方から高知県の事例などが出ましたけれども、わりと似ています。今からちょっと簡単にお話ししますと、社会の変化の中で、どういう人たちが、どういう目的で移住先を決めたり、移住していくのか、移住した先でどんな暮らしが待ち受けているのか、というのは社会の変化の中で大きく変わってきました。

で、私たちはそれを研究してきたわけですけども、簡単にご紹介しますと、例えば1970年代、もう今から40年、50年近く前になるんですけど、70年代に一般的だったのは社会運動を何かやっている人、あるいは学生運動をやっている夢破れて地方に行って、という形の人が多かったです。逆に言うと、そういう人たちしか移住という形を取らなかったの、移住先でははっきり言って、変な人、と思われていたし、本人たちも移住先に溶け込むつもりはないような人たちが多かったです。と言っても、変な人たちだったわけではないんですよ。

それが大きく変わっていくのが、1980年代、90年代になっていってからです。で、その頃はもう既に、都市、都会での暮らしというものが本当に人間的な暮らしなんだろうかということに疑い始める人たちが出てきました、で、都市にはない、イケダさんの話にもありましたけど、人間らしい暮らしって何だろうっていうようなことを考えた人たちが、都市にはない魅力を求めて、80年代、90年代に、多数派ではないけれども、移住する人たちが増えてきました。で、その人たちは40代後半から、あるいはもうちょっと上、そして定年後の人たちが多かったんです。だから、若い夫婦が、子どもをこれから産んで育てて、っていう人たちは移住者のタイプとしては少なかったんです。移住先でその人たちは一生懸命地域に溶け込もうとしたし、受け入れ先となった移住先の人たちも、せっかく来てくれた人たちと何とかうまく受け入れてやっていこうという風にやっています。

ただし、行政の方はなかなか整備が遅れます。ほとんど何の整備、受け入れ態勢もないまま、80年代、90年代は過ぎていきます。で、2000年代になって、もっと移住者は増えていきます。それは特に、若い人たちが出ていきます。震災以降、2011年3月の福島原発以降、特にその傾向は顕著になっています。今、2016年ですけれども、この5年間の変化はすさまじいものがあります。実際に移住した人だけでなく、何かおかしいな、これでいいのかなって思っている人たちは、もっともっとたくさん、実はいます。

私は先ほど、鳥取県と島根県の話をちょっと、あ、研究してきたと言いましたけれども、鳥取、島根で今、その傾向がとても顕著に表れています。20代で、20代以上の若い人たち、独身者も多いのですが、若い夫婦が子どもをここで、これから育てたい、あるいは若い女性たちが単身で移り住んでくる、そういう事例が、鳥取、島根で目立ってきています。そこにあるのは、鳥取島根が日本の中ではとても人口の少ない県です。鳥取県は人口最少県、人口60万を切っている県です。島根県もそこまでは少なくないですが、やっぱり少ないです。鳥取、島根がどこにあるのかが東日本の方たちにはなかなかはっきり分からない方が多いと思います。危機感がとても行政に強かったので、早い時期から鳥取、島根では行政が先導して、というか、主導的に力を発揮して、色んな制度を作ってきました。それと呼応する形で民間の人たちも色んな取り組みを始めました、受け入れの取り組み。今、ちょうどそれが実を結んでいる形になってきています。

ということだととても珍しい、日本の中では田舎の田舎、と言われている鳥取、島根の両県で、移住者が増えている、そして、移住者がきちんと定着して、暮らしを作っている。そういうのは、ある意味、最も新しい事例のような積み重ねが、今そこで起きているということです。で、これはきっと、長野原の町にとっても、とっても参考になることではないか、それはイケダさんの話の中にもあったけど、何で人がそこへ移住してくるか、そこにあるポイントは、おもしろい人がいる、すてきな人がいるかどうかという、人に魅かれてやってくるということではないだろうか、ということが鳥取、島根のことでも、言うことができます。

改めて移住してくる人たちだけでなく、もともとそこに住んでいる人たちも、自分はなぜここに住んでいるんだろうと考えた時に、いい友だち、知人、あるいは家族がいる、そういう人、一緒にいたいと思うような人が、自分の身近にいるからではないかなあというのも、もう一回、再発見というか、再確認できるんじゃないかなと思います。以上です。

関口：ありがとうございます。またおいおいお話しかがいます。次は、町長にうかがいます。町長は最初のご挨拶で、キックオフという言葉が使われて、まさにこれから地方創生が始まるからキックオフだということもあるでしょうし、町外から見ますと、長野原町ってずっとダムのこととどうなるのか、そればかりがずっと言われてきて、もしかしたらこの移住のことや住民生活のことを腰を据えて考える意味でも、ま、今まで何もやってこなかったと言うのではありませんが、キックオフ、色んな思いがあつてのキックオフなのかなと思います。まずその基本形、基本的な思いからお話しただけなら、それと合わせてこの地の紹介とかですね、特徴なり、お話しただけならと思います。

萩原町長：長野原町の町長の萩原でございます。うちは先ほど関口さんがおっしゃったように、長野原町、私が町長になる前、移住、定住の施策というものは、ほとんどなかった。そういう言葉すら、なかったように思っています。ただ私は、町長に就任した当初から、もう全面的に移住政策やっていくんだ、という思いで始めたんですけども、行政っていうのはやろうと思って明日からやれる、というのではなくて、その部分が非常にイライラしたりとか、そういうこともあったんですけども、去年、空き家の調査、全調査をして、ようやく今年から空き家バンク、長野原町

の空き家バンクもようやくスタートできたというのがあります。

そういう部分で、まず長野原町がちょっと特徴から話したらいいんですね、ご存知の方も多いと思うのですが、長野原町は高原野菜と酪農を基幹産業とする、豊かな自然と多くの観光資源を持っている、恵まれた町だという風に言えると思います。そして、特徴的なのは、昔から、長野原町は2つに分けるような雰囲気がございます、いわゆる南側はここ北軽井沢、応桑地区を主とする浅間高原エリア、そして北側といいますか北東側、そちらの方は先ほど関口さんからありましたように、八ッ場の水没地区を中心とする八ッ場エリア、あの、上の段と下の段という言い方があるぐらいで、ま、標高差も低い所と高い所では、700メートルくらい違う、低い所でも600メートル、高い所では1300メートル、700メートルも違うという。もちろん、気候も違いますし、人々の考えや温度差も違う。私は町長になる前、この上の段、下の段という言葉がすごく嫌いで、こんなに小さな町なんだから1つでまとまってやるべきだということ、今でも訴えておるところでございます。

また、人口に関しては残念ながら、当町も人口減少の問題に、問題を免れることができません。一番ピークの時、長野原町、おそらく8300人ぐらい、人口があった時期があったと思います。現在は6000人を割りこんでいる、このままの状態、何もしないでこのままでいくと、2025年には5000人を下回ってしまうという推計も出ておるところでございます。1つ、大きな特徴としては先ほどから出ています、八ッ場ダム建設に伴う人口の流出というのが非常に大きな部分がございます。まあ、ただ、驚くことに、八ッ場ダムの建設とあまり関係のない、ここ北軽井沢、この地区だけは、長野原町10地区あるんですけど、この40年間、ほんとにわずかなんですけども、人口は増え続けております。まさにその微増の要因というのは、他地域からの移住だと思っております。

それと、私のことも言ってもいいんですかね、私はこの北軽井沢の隣の地区にある、応桑という所で生まれて育った人間なんですけれども、高校の時から一人暮らしというか、下宿生活をやってましたんで、長野原を出てって、次に長野原に帰ってくるまでに10年間ございました。で、私の地域は長男だから田舎に帰ってくるんだという暗黙の了解のようなものがあったんですけど、私はそれを当たり前のように消化することができなくて、まあ、こんなこと言っているのか悪いのかもしれませんが、実は長野原町に帰って来たくないっていう時代がありました。ま、そこで、自分、どういう進むべきかっていう、まあ、色々悩んだり、葛藤の時期があったんですけども、そのまあ、色々悩んでいるところで、ボクシングで食べていこうと、ボクサーになったりとか、え、例えば、まあ、笑っちゃうかもしれませんが、モデルになろうと思って、CMに出たこともありました。ま、でも、なかなかそれでも自分の進むべき道を、あの、探すことができなくて、で、今考えると、逃げたのかなあなんて思うんですけど、まあ、それはどうか、分かんないんですけども。その後、海外を放浪の旅に出ました。で、十数か国くらい巡ってきたんですけども、完全に外部から長野原町のことを見るようになりまして、今思うと、長野原町、まんざらでもねえなと思って、田舎に帰ってきた。僕がそうです、はっきりしてます。ま、そのあとまた話もあるんですけど、機会あったら、また。すみません。

関口：ボクシングされてたとは知りませんでした。あのそれでは、次はライターの方藤野さん、それからプレジデントリゾート軽井沢の営業支配人隈上さん、お二人に、あ、町外から移住されてこちらに住まわれているということですよ。住まわれての印象とかですね、ご自身、こんなことやってますよ、とか、そのへんの自己紹介含めて、順にお話お願いします。

藤野：藤野です、あ、いいですか、すみません。藤野麻子と申します。えー、ここから5分、10分くらいの所で、週末はむぎこや（麦小舎）というカフェをやっておりまして、ふだんはライター・編集のお仕事を今やって、暮らしております。移住して12年になります。そもそも、移住したきっかけは私の父、まあ、家族が私が生まれる前から北軽が大好きで、親戚で山小屋を共有して、あの、持っていました。

もう30年以上前からなんですけれども、今、私が暮らしている家は父がそこから出て、一人で自分の山小屋持ちたいということで、35年くらい前に建てた小屋に、12年前に引っ越してきました。小さい頃から、休み、学校が休みになると北軽に来ていて、北軽以外の所に連れて行ってもらったことがない、っていうぐらいなんですけども、まあそれぐらいほんとに沁みついていたので、どこかで、いつか、住むことができたらいいなあというのは、20代の頃から考えていたんですけども。ちょうど30になるタイミングで、東京での仕事がひと段落したりですとか、あの、色ん

な、まあうちの両親が年を取ったので山荘も誰かに譲ろうとか、そういう話がちょうど同時に起きたもので、じゃあ、住んじゃおうかな、っていう感じで。ものすごくあの、そんなすごい覚悟を持って来たというよりは自然なタイミングでこっちに移ってきました。

で、最初はまあ、どういう風に暮らせるかが分からなかったのも、私も夫もそれぞれ軽井沢に働きに行ったり、夫は地元のキャンプ場で働かせてもらったり、ということをして2年ぐらいしまして。やっぱり、北軽いいな、住めそうだなと思ったので、そこでちょっと、前々から思っていた、小さいカフェをやりたいということを実現させまして、ただそのカフェというのも私たちの場合は何かこう、カフェで食べていこう、というよりは、私も大好きなこの北軽という場所に、色んな人が訪ねてくれるきっかけの場所を、何か開かれた場所が作りたいな、ということを書いて作ったので、びっちりカフェだけをやるというよりはもう週末だけと最初から割り切って、で、それは自分たちも楽しんでやる範囲にしよう、と。

で、その代わり、まあ、生活は何かで食べていかなければいけないので、平日はうちの夫は大矢原の、こちらに美紀さんいらっしゃいますけども、大矢原という開拓農家さんの地域の清水さんという農家さんのおうちで、農業の手伝いをさせてもらったり、冬はスキー場に行ったり。で、私も、朝だけですけど、ちょっと畑の手伝いに行ったり、で、昼間はちょっと書く仕事をしたりと、週末になるとお店をやって、というスタイルで今暮らしています、はい。

関口：ありがとうございます。隈上さん、いかがでしょう。

隈上：みなさん、こんにちは。プレジデントリゾート軽井沢の隈上と申します。あまりあの、地元の人からは利用されていないホテルかと思えますけれども、まもなく会員制を止める方向で動いていますので、今後は地元の方にも開かれた施設にしていきたいと考えています、どうぞよろしく願いいたします。

あの、私は2008年6月に、このエリアに、当時まあ勤めていた旅行会社の先輩がホテルに勤めていまして、まあ、来ないかと呼ばれて、来ました。で、その時のセリフは、この前、おとといですか、あの、ケンミンショーの嫁いできた人も北軽井沢って、北が小さくて軽井沢が大きくて、と言われたという話がありましたけれども、私もそんな感じで軽井沢のホテルだから、来ない？ っていう感じで来た。私の場合、移住って言っても、まず仕事が決まっていたという形で来た者です。ですので、ちょうど丸8年、9年目という格好になりますでしょうか。で、今のプレジデントリゾートの方では、月に1回のイベントでこのエリアを歩いたり、まあ山場だけでなく、この4月は町長のお話に出てきた八ッ場ダム、八ッ場ダムの見放題と反対側の方から、両方から進捗状況を見たり、歩きながら見たり、というようなところを、そういうイベントをやったり。あとそれから、去年のクリスマスには地元の方に大変お騒がせいたしましたけれども、ももいろクローバーZのコンサートを担当したのは私でございます。当時は、ご迷惑をおかけしまして、申し訳ありませんでした。あの、そういった大きなイベントとか、そういったものを今担当させていただいたりしています。

で、こちらのエリアの印象っていうのは、やはり、最初にびっくりしたのは、「あの、隈上さん、昨日、どこどこに行ってたでしょ」とか、「直売所でキャベツ買ったでしょ」とか、どこで見てるだろうっていうぐらい、見られてた、見られてるんですね。多分、これ、車で人を認識している、こういう北軽井沢の人々は車で人を認識する能力が高い人たちなのかなと思いました。まあ、そうやって8年くらい経ちますと、私もだんだんその能力が身につけてくるんじゃないかなと、そういう意味では北軽井沢の人に近づけたのかなと今、移住者ながら考えております。今後ともよろしく願いいたします。

関口：はい、ありがとうございます。続いてですね、今度は、山崎さん、星野さん、昔からお住まいで。あ、山崎さん、歌をどうもありがとうございました、幕間で熱唱されていたのが、こちらにいらっしゃる山崎さんです、素晴らしい歌声でした、ありがとうございます。今、移住の取り組みへの感想とか実際に住まれて日々思っていること、毎日のお仕事の紹介と合わせて、お話いただけないでしょうか。

山崎：えー、しゃべるのが得意じゃないので、ちょっとあの、とりとめがなくなったら申し訳ないんですけども。自分のルーツ、自分の先祖がこの長野原、北軽井沢に移住してきたのは、分かってる限りでは6代前の山崎でんじゅうろうさんという人が、移住されている、その時は養蚕農家だった、やっぱり農家で移住だったんですけど。

で、まあ、満州帰りの開拓、先ほどもちょっとお話が出ましたけれど、が自分の祖父でその3代目の祖父がまたさ

らに開墾して、その頃から野菜なんかを作り始めて、で、うちの父がアメリカ研修とかを、農業研修ですね、経て、就農して。まあ、自分も小さい頃から憧れがあって、研修生とかが家に居たので、自分は漠然とアメリカ研修に行くんだろうな、と思いながら。ま、実際、行って来まして、で、何を間違ったか、このシンガーソングライターという名乗りを突然上げ始めてしまったという、周り、日々、堅実な農家であるうちの両親からは、何か不思議な生き物を見るような眼で見られながら過ごしているんですけども。

えー、今農業面でも自分の家の野菜を、色々な種類の野菜を作る農法っていうんですかね、土を大事にするために輪作っていうんですけど、そういう方法で種類がいっぱいあって、そのまあ、シンガーソングライターなんていうぐらいだから、わりとこじんまりとした農業なのかなと思われることも多いんですけども、自分の今年の作付なんですけども、えー、レタスが11町歩で、95万株、です。あとキャベツが7町歩で、1反9トン換算で630トン、あとモロコシが15万本、ハクサイが14万株。で、持ってるトラクターは16台、それで、研修生を含めて6人か7人の体制でやってるんですけど、まあ、そういった中で、一番体はつらいし、気候もご存知の方多いと思いますけど、冬が厳しくて農業はほとんどできない、ほとんどって、全くできないですけど、マイナス20度とかになることも、まああるんで、その、この北軽の上の方では。それを越える、燃料費の元を取れる作物はありませんので、はい、なので、その維持費と高いので、維持費は年間かかります、土地も建物もトラクターも、そういった中で自分の野菜を輪作している中で、色々な種類がある、と。

で、よく農家さんから野菜をもらう人で、キャベツ1箱をドーン、と困っちゃったなあ、という経験、心あたりある人もいるかなあと思うんですけど。自分も農家側なんで、配ればいいじゃん、そんなにすぐ悪くならないよと思うんですけど、案外とそこを気にされてそこを配ってお返しなんか悪いらしいし、そういう気持ちも分からないと、分かる、というより分からないといけないかな、とこれからは農家は、と思ひまして、その用意したギフトボックスってその20キロぐらいのサイズの箱なんですけど、キャベツとレタスと今だったらモロコシと、で、家庭菜園で、農家がやってる家庭菜園なんですけどダイナミックなんですけど、採れたもろもろのものをに入れて、そのアソートギフトボックスっていうんですけど、ということでお届けさせてもらうことを始めたんですね。

そこに、最近起業した高崎の友だちが住み込みで手伝ってくれて、来ていまして、今、外で野菜を売ってくれていたあさださん、なんですけど。水やりとか、ちょっとした手間仕事っていうんですかね、あと、子どもが小さいので、今、自分の子どもが3人ぐらい男の子、全部男の子でいるんですけど、その送り迎えとかも、全部時間帯が違って、そこに手を取られて農業が全くままならないと、で、どうしようって考えた末に、そういう人がアシストって、してくれるとすごくスムーズに回るんですよ。

そういう可能性っていうか、お膳立てされた仕事っていうのは、あんまりもしかしたら、都会よりはずっと少ないかもしれないですけど、そういった可能性みたいなものはまあ、無限、といったらちょっと言い過ぎですけど、限りなくそれに近いぐらい広がっているんじゃないかなあというのが、色々なそういう何て言うんですかね、変わった人であったり、変わったことを笑って容認してくださる方が、どんどん、移住して来てくれると、地元民としても、ちょっと楽しくなりますので、そういう日が、そういう人が色々来てくれたらいいなっていう思いは持って過しています。

関口：ありがとうございます。続いて、星野さん、お願いします。

星野：こんにちは、大矢原に住んでいます、星野と申します。みなさんのようにお話が上手じゃないので、聞きづらいこともあるかと思いますが、よろしくお願いします。えーっと、我が家も夫のおじいちゃんは何もない、ほんとに、木と石だらけの高原に満州から帰ってきて、開拓で入った、おうちです。で、現在は3代目になる夫と家族経営で、成牛が40頭、母乳、育成牛が20頭の、ま、地域で言ったら小規模な方の酪農家をやっています。

そうですね、子どもは4人いて、もう、一番下の子が中学生になってしまったので、子どもの方はあまり子育てをしているっていう感覚ではなく、今は仔牛の方に力を入れて一生懸命に元気な仔牛を育てているところです。北軽は、そうですね、もう自然が豊かで子どもが育つにはとてもいい場所じゃないかな、と思ってます、はい、そんなところで。

関口：はい、イケダさんにまたちょっとうかがいたいんですけど、先ほど講演のお話の中で、人が呼び込むんだって

いう部分もあったと思うんですね、まだ来て、24日からで期間は短いかと思うんですけど、ただ先ほど楽屋でみなさんと和やかにお話もされていたような気もするんですけど、直感的に、みなさんには失礼な話なんですけど、ここは住みやすそうとか、人肌はどうかとか、何か感じるものってありますか、どうですか。

イケダ：ま、非常にドライな、まず、ドライに、冷静に言うと、町長がイケてるのが素晴らしいと。別に何か、こう、おべっかとかじゃなくて、町長、イケてますよね。こういうタイプって、珍しいですよ。多分、長野原居る人、幸せだと思いますよ、ほんとに。こういうやっぱり、いや、ほんと、何か持ち上げてるんでなく、逆に変な感じになってますけど。

やっぱり、僕、何かあの、自分の住んでる町をどうこう言うのはあれなんですけど、僕が住んでる辺りだと、あんまり首長が、まあ、やっぱり、おじいちゃんが多いですよ。だからまあ、もともとそんなにこう、ずっと役場から上がってきて、みたいなパターンが基本的には多いわけですよ、で、多分、日本の田舎行くと、だいたいどこもまあ、昔ながらの人が、おじいちゃんが町長やってたりするんですよ。すると、なかなか、こう、行政の動きがどうしても重くなってくる、と、こう話が進みにくいな、っていうのはある。ま、僕が住んでる所もちょっとその傾向がありますし、高知ってまあ、場所によっては全然行政の方が逆に足引っ張っちゃう、まで言っているぐらい、あんまり？？な場所ってあるんですよ。

でもこの町は、町長がこれだけまあほんとにリーダーシップ取って、新しいことやっていこうって思ってくれているし、実際、行動もちゃんと取っていくっていうことを、これだけ信用できる方がいらっしゃるってことは、ほんとに素晴らしいことだなあとと思いますよ。で、まあそこは、非常に客観的によく、自分たちはいい人を選んだぞ、っていうことをよく考えておいた方がいいなと、僕はそこはすごく羨ましいなと外から来て、今思っています。

で、あとは、民間でもこうやって若い方がたくさんいらっしゃるって、元気でやっていて、で、そんなに悲観的になり過ぎていない、っていうか、多分、何とかなるっていう、楽しみながら日々暮らしている、みたいな感じが、話からは伝わってくるんで、こう、田舎に行くと、どうしてもまあ、若い人たちが元気がなかったり、うちの地域なんか、何もないんだよなんて言う方、まあ、この地域にもいらっしゃると思うし、僕らの地域にもいるんですけど、っていう感じでは少なくとも今話している方たちは全くないので、まあ、地域のことを愛してますし、多分、もっとより良い方向に行く、今は楽しいし、より良い方向に行くっていう、ある種の自信を持っている方々がいて、一緒に過ごしていてそういう人は楽しいですよ。っていうことを感じました。

関口：町長、あの、今は特にコメントは要らないんですけど、すごい期待されてますね。それであの、シンポジウム、進めたいと思います。今度は、だんだん、あの、町政の要望とか、そんなことをうかがってまいるような流れになるんですけど、移住されてきた藤野さんと隈上さんにお尋ねします。あの、こちらに住まわれて、さっきもイメージの範囲でうかがったんですけども、感想とか課題点、あるいは町への要望、あるいは住民への要望でもいいんですけども。こうなったらもっとよくなるんじゃないか、とか。そういう点、日頃気づかれている点ないでしょうか。

藤野：そうですね、やっぱり、最初、住み始めて1~2年というのは、すごくほんとに個々の自然環境の素晴らしさっていうことに、もうただただ魅了されてっていうか、あの、すごくドラマ、四季の変化がはっきりしていますし、きれいな風景、いつも見られて、浅間山がどーんと見えて、きれいだな、きれいだな、って。感動ばっかりして過ごしていたんですね、で、だんだん、そのうち、もう風景の素晴らしさとかはあるんですけども、ほんとここは、人がすごくおもしろいな、って。

さっき、イケダさんの話にもありましたけれども、すごく個性的な方がたくさんいて、で、色んな人種、っていうとあのちょっとおかしいんですけど、色んなタイプの方が混ざり合って暮らしている町だと思うんですね。で、もともと長くそのおじいちゃんの代やもっと前の代からいらっしゃる方もいるし、で、戦後、開拓で入って来られた方もいるし、またさらにちょっと時代遡って、戦前からその法政大学村ですとか、一居村のような、古い別荘地に代々通ってらっしゃる方は、夏というかもう半分こちらの人のように暮らしてらっしゃいますし、で、あの作家さんでも多くの方がここを好きでいらしてたりとか。何かあの、すごい、住んでると当たり前っぽく思えちゃうんですけども、冷静にちょっと見てみると、すごい不思議な町だなあと思っている。

その、人の魅力がとにかく、どんどんどんどん、見えてきて、で、有名な方だけでなく、普通に暮らしてらっしゃ

るおじいちゃん、おばあちゃんとかが、すごく物語を持ってたりとかするので、そういう話はずっともっと聞きたいなあと思っていて、で、ちょっとまあ、先ほどご紹介できなくてでんでんになってしまいますけれども。あの、入口でちょっと配らせていただいたんですが、まあ、フリーペーパーきたがる、というのを今、制作・発行もさせていただいております。で、これは、きたがる、もともとあのもっと前からこのきたがるという冊子はあったんですけど、ちょっとスタイルを変えて、今年の春から、また復刊したものになるんですが、あの、北軽の色んな魅力が、一言で言えない、色んなおもしろさ、人とかそういうのがあるので、そういうことを1個ずつ掘り起こしていきたいなというつもりで、今、色んな方に会ってお話聞いたりして、もう何か、調べたいこととか、会いたい人とか、たくさんあり過ぎて困ってしまうほどなんですけど。で、そういう、人の魅力っていうことは、一つ、あります。

で、一方で、良いことばかりでもないと思っていて、実際に暮らしてみたいへんなこともありました。やっぱりあの、冬場の仕事探し、とかですね。夏はほんとにさっき、イケダさんのご紹介にもありましたが、何でも、元気があれば、やろうと思えば仕事は結構あると思うんですね。で、うちの夫も実際、そんな風に暮らしてきましたし。ただ、ほんとに、冬場になってしまうと農家さんはもちろんお休みになりますし、観光業も閉めたりとか、ま、その人手は要らないということになってしまうので、冬場の仕事っていうのをもう少し、何でしょう、確実にできるとか、ま、通年で働けるっていうことが確認されれば、もっと入りやすくなるのかなあ、と。

もう一つ、あと、地方なので生活にかかるお金はだいぶ安く済むというのはほんとにあると思うんですけども、ただ、結構、思ったよりも安くない、というところもあって。冬場の暖房費とか、東京いた頃よりもちょっともうびっくりするぐらい高いですね、うちは薪ストーブも使ってるんですけども、やっぱり燃料代っていうのはすごいかかるので、ああやっぱり、かかるところはかかるなあと思いますし、車が一人1台は当たり前なので、その維持費ですよ、で、タイヤなんかもちろん換えないといけないですし、換えた冬のタイヤでも1年でもう塩カルですごい傷んでしまうので、まあ2~3年使えばもちろん買わないといけないし、っていうような生活にかかるお金でちょっとたいへんなところもあるってことは、最初に知っていた方がいいかもしれないと思っています。

関口：同じ質問ですけども、隈上さん、いかがでしょうか。

隈上：はい、私はまずやっぱり、浅間山に魅了されてしまって、私、兵庫県の出身なんですけども、海の向こうにちょっと淡路島が見えるような、兵庫県加古川市っていう所なんですけど、そういうシンボリックなもの、っていうのが周りにない、というか見えない。で、ここへ来た時に、四季を感じたり、時間を感じたり、そういうものを浅間山を中心に、感じるようになりまして、ここにもう住もう、ずっと住もうと、当時思っていて、マンションも今、買っちゃいまして、こっちで知り合った人と、地元の人ではないですけど、ま、2回目の結婚、させていただいてですね。あの、そういう意味では、このシナリオ（関口さんが事前に渡した資料）に幸せかどうか書いてあるんですけど、幸せとっていいのかなあと思うんですけども。

あの、要望といいますか、今、8年と申し上げましたけども、最初の4年と今の4年でちょっと違っていて、地元の方々と接するようになった後半の今の4年間っていうのが、やっぱりここで暮らす、生きていくっていうことが充実してきたという風を感じています。今の仕事は営業の方やってみて、観光協会の理事もやらせてもらってますけど、その前にちょっとスイートグラスさんにもお世話になっている時もありまして、その時、じねんびとにも関わらせてもらったりして、地元の人と接する機会が、最近で言うと観光協会がやってる夏祭り、高原祭りとか、冬の花火とか、そういう準備から色々地元の人とお話する機会がすごく増えて、ま、そういう機会をいただいて、ほんとにここで生活しててよかったなど。あと、SAVE ON（群馬県内にあるコンビニエンスストア）がリニューアルした時に、私も行ったんですけど、15分ぐらいいるだけで、20人ぐらいのお知り合いの人に会ったりしてですね、これ、1日いたら、全員の人と会えるんじゃないかっていうぐらい、知り合いが増えたというか、やっぱり移住して来て、後半の4年間はそういう活動を通じてお知り合いが増えたっていうのが、あの、今、非常に幸せを感じる1つの要因かな。今日、イケダさんのお話の中でコミュニティっていうお話がありましたけれども、これ、誰が作るのか、自分で作るのか、ちょっと分かりませんが、これは必要なかなっていう風に改めてお話をうかがって感じました。以上です。

関口：どうでしょう、その、移住の核心、こうなるともっとさらに良くなるし、アピールできるよって、何かこう、



思われることって、特にないですか。

隈上：そうですね、あの、また、ケンミンショーの話じゃないですけど、この場所がどういう場所なのかっていうアピールが、ちょっとまだ不足しているのかなっていう風に思います。軽井沢だと思って来た人、ま、観光客も含めてですけども、私もですけど、あのまだ結構多いと思いますし、ま、それに乗っかってもいいと思いますし、でもやっぱり、北軽井沢と軽井沢は違いますし、その部分をもっと表に出ていけば、正直、例えば買い物、ここだったら、中軽のつるやさんとか行ったり、まあ、休みの日だったら高崎とか上田とか出かけますけど、ネットで今、アマゾンでここ、関東なんですよ。だから、次の日、着くんですよ。ま、そういう意味ではすごく便利だと思いますし、そういった部分が週及できれば、住みやすいよっていうのが週及できればいいのかなと思います。終わります。

関口：じゃ、ここでまた、町長にうかがいたいんですけどね、あの、今、お話では冬場の仕事、雇用の問題のこととかですね、あとは生活上ですと暖房費が生活上コストがかかるとか、またこれ町政の範囲を超えた部分かもしれないですけど、この北軽井沢の位置、そのアピールの話も出ました。今、キックオフの元年ということですから、全て一気にというわけにはいかない部分もあるかと思いますが、また、前段の基調講演ではですね、行政は住宅と制度と人材活用を、ということでイケダさんのお話の中にもありましてですね、やっぱりどうしても地元を支える自治体への期待といいますかね、色んなものがあると思うんですけど。これから町長、町政としてどんな風な方向でですね、この移住促進と活気を生み出していくこと、取り組まれようとしているのか、その基本的な考え方、いかがですか。

萩原町長：えとちょっと、先戻っちゃうんですけども、イケダ先生に何かほめられた、しまって、私あの、ボクシングの話しましたが、打たれることには慣れているんですが、ほめられると不安になるので、やめてください。ええ、施策としては先ほど空き家バンクっていうものを今年4月から、開始した。昨年度、全部の空き家を調査して、空き家バンクを今年4月1日からスタートさせたんですけども、それに伴う施策として移住者に向けたその空き家を回収するための補助金の制度とあと、貸す方にとってはその家財、貸すために家財の処分をするとか、そういう部分の補助の制度を作りました。

それと、移住してきた人たち、地元の人でもいいんですけども、新たに起業する人、ベンチャー、何でもいいんですけども、の方に運営資金、始める資金として、最大で事業費の2分の1、100万円を補助しようということはこの4月から始めようとして、まだちょっと該当者いないんですけども、この近辺になって2~3件、そういう話が出てきたところなんで、さっき、イケダ先生にも5年で5件は…っていう話がありましたが、もう今年の中で3件話も出てきているようなので、まあ、お金が全てではないと思いますが、お金の部分も大切ですし、まずは我々がしっかりと移住してくる人たちを受け入れるんだ、ということアピールしていくことが大切なんだ、ということをおもいます。

ま、隈上さんが言ったように、長野原、北軽井沢、まだまだPR不足だと思いますので、その辺、マスコミを使うのか何を使うのか、分かりませんが、その分野にはしっかりと力を入れていきたいという風には思っております。あと、藤野さん、隈上さんが自分の動きがチェックされているというような話がありましたけれども、私も隈上さんの動きはしっかりとチェックしています。

なぜかというところはやはり、イケダ先生の言うように、隈上さん、おもしろいですよ。あの、去年も、ももいろクローバーZのコンサートを3日間、プレジデントでやったんですけども、長野原町の人口が6000人ですけど、1日7000人の観客が3日間21000人来たと。これは今までの長野原町の歴史にはなかったことだと思います。隈上さんのおもしろさがあるから呼んでこられたんだなあという部分もあるし。藤野さんは色んな仕事をして、6分の1ワーク、っていう言葉があるように、少しずつでもいいから、いくつも仕事をやってけば食べていけるんだよ、ってことを実践している方なのかな、と思うし、藤野さん、見ていただいても、やっぱり、見た感じも、おっしゃることも、素敵なんですよ。あの、素敵の方だし、おもしろいし、やっぱりそういう人が来ていただくこともうれしいし、そういう人を目指して来ていただくことが、私の今、願いですね。ちょっと何か、話がまとまらなくなっちゃってます。

関口：いや、全然、そんなことないです。ありがとうございます。続いては、今度は、既に住まわれている星野さんと山崎さんに、順々にお聞きしたいのですが。星野さんからいいですかね、移住のことについて、旧住民という言い

方は非常にいやで、何か土地の人間のネットワークを引きずっているような、ま、それは、どうも旧住民という言い方があんまりピッタリはしなくて恐縮なんですけれども、今まで住まわれている方々から見て、町が、ま、これ、全国的な流れではあるんですけれども、地方創生ということの中で、移住促進の施策、ある意味ではお金も払う、必要ですよ、あるいはもう一度融合ということであまりうまく折り合いをつけてやってかなきゃだめだ、というところもあるでしょう。それから、本音の部分は、どう、どう、どうなんですか。何かこう、人によっては、ちょっと、って思う人もいたり、するんじゃないか、と勝手に思っちゃったりするんですけれども、その辺の町民の意識というものは、どんなところにありますか。

星野：そう、ですね、私は、多くの方に、この地区に来てもらって、北軽のいい所をたくさん見つけてほしいなあって、個人的にはすごい思ってますね。私の住む、大矢原地区っていうのは、結構色んな地区から若いお嫁さんが入って来ていて、色んな考え方を持っている人がたくさんいるので、たくさんの人にこの地区に来てもらって、ほんとに色んないい所を見つけてもらって、かえって私たちに教えてもらえたらいいのかなって思ってます。

関口：あの、山崎さん、先ほど、研修生の方も色々受け入れたり、大きな、広く農場をやって、あの農業をやってらして、さっきのお話の雇用とか、そういう話の中で新住民の方の手間があると、うまくミックスできる部分もあるんじゃないか、ってお話で思ったんですけど、そういう点はいかがですか。

山崎：ちょっと自己紹介の段で言う話ではなかったかもしれませんが、申し訳なかったです。えーと、そうですね、その、やっぱりそのお膳立てというか、その、先ほども言ったように仕事っていうのはもしかしたら少ないのかなとも思うんですけど、冬場は特にね。そうなんですけど、まあ、冬場の解消はなかなかハードル高いですけど、夏場で、言えば、農家なんで、例えば就農、新規就農をされるような方が、ちょっとその、右も左も分からないっていうか、どうしたらいいんだろう、みたいな、ちょっと考えてるところに、僕の友だちの、新潟の魚沼って、お米の大産地、そこでファームハウスっていう建物を町が用意してくれて、そこに新規就農希望者をあつせんする、ここに住んでおそらく農地も、詳しくはちょっと分からないんですけど。そういったようなことを長野原町でもほしい、JAとかとの協働でとか、そういうのでやってくれて、その上で新規就農の方が入りやすいような窓口ができれば、おもしろいかなという。割と結構後継者問題、というよりも、むしろ、畑がそんなに空いていないかもしれないんで。

でも、ま、休耕田、違うね違う、畑が空いている所も、僕の目の届かない所ではあるのかもしれないし。やっぱ、帰ってきた人が、結構、後継者入ってらっしゃるんで、どんどん拡大してってるような状況なので。まあだから、いきなり一人前の農家として立ち立つために入ってくる、というよりも、その例えばそのサポート、蒔き専門部隊とか、箱作り専門部隊とか、運ぶ、その予冷庫まで運んでくれるとか、そういう、何て言うんですかね、アウトソーシング的な部分をむしろ紹介して、もちろん、それしながら農業学んでいずれは立ち、みたいな。そうすれば失敗しない就農、っていうのも夢じゃないのかなって思ってる所、ありますね。何をどう提供するのか、どこから手を付けたらいいか、全く分からないですけども、はい。

関口：そういった取り組みも是非、期待したいところですね。えー、では今度、鶴先生にうかがいたいのですけれども、あの、冒頭の、移住に関する人の受け止め方、70年代は何となくドロップアウト路線でね、だんだん今ポジティブになって、確かにその後みなさんのお話うかがってると、その、移住ということを非常に前向きに、ポジティブに捉えていて、イケダ先生もそこにフロンティアスピリットを強く示されたし、共感したところなんですけど。みなさんのお話をうかがっていて、どんな感想を持たれましたか。

鶴：え、ああ、もう、何というんですか、ええと私はまあ西日本で主に色々調査や研究をしてきたんですけど、今日うかがったお話はとてよく当てはまるというか、共通性が高い、という意味では普遍性が高いなと思ってうかがってました。

あの今、例えば山崎さんが今おっしゃられた、農業をやりたいと思って入ってくる人がいきなりそんな農業であまりうまくいくわけではないのであって、先ほど紹介した、例えば島根や鳥取の方の事例でいきますと、そういう新規就農を希望する人に対しては受け入れ側、行政の方を中心として作った受け入れ側の組織がきちんと話を聞いて、例えば有機農業が割と盛んなんですね、島根県の場合。で、新規に就農したいって言う人のほとんどは有機農業をやりたいと言ってるんです。で、それは幻想の人も多いんですけど、あ、場合もあるんですけど、でも意外とそうでもなかった

りして。

で、そういう話をちゃんと聞きながら、農家に実際に研修に入っていく、そういう仕組みも作っている。で、月々例えば10万くらいのお給料が出るような、そういう新規就農の制度をきちんと県で作っているというようなことが、あったりします。まあ、ここは町、町レベルでどこまでできるか、っていうことはあるかもしれませんが、移住して来たい人の希望をきちんと聞く、丁寧に聞いていく。個別に対応していくということが、成功している所ではもう間違いなく見られています。

それからその、タイプ別で言えば、就農型ばかりでなく、農的な暮らしをしたいっていう人ももちろんいるわけで、そういう人の場合には、じゃあ、住まいをどういう風に紹介するのかとか、もし、畑を借りれるとするならば、田んぼや畑を借りれるなら、どういう風な紹介の仕方があるのか、とか、そういったもの場合は、農地委員会、農業委員会などがこれまでは大きな役割を果たしてきました。

あるいはここでしたら、別荘地もしくは二地域居住を希望する人が割と多いんじゃないかと思うんですけど、そういう人たちに対する紹介の仕方。行政がやれること、民間がやれることをきちんと見極めながら、仕組みを作っていくことが、きちんと対応するということにつながると思います。

それから、もともと住んでいた人たちと移住してきた人たちが、できるだけ交流するような、そういう機会があることが、何よりも望ましいと思います。なぜならば、この長野原町は人口6000人くらいの町です、非常に、ある意味、住民がそれぞれ自分の町を作っていくのに関わりやすい、参画していきやすい、とてもいい規模だと思います。ですからあの、町長のリーダーシップももちろん大事なんですけど、住民の方たちの色んな行政への参画っていうことができる、とってもいい規模だと思うので、そういうものを生かして、是非移住を進めていく、その一方で、Uターン、いったん出て行った、ここを、まあ、高校や大学その他就職などでいったん出て行った人たちがもう一回帰ってくる、長野原へ帰って来て、ここでもう一回色々やりたいな、っていうUターン者への目配りも、どういう風なことを整えればUターン者がもっと増えていくか、とか。実際、Uターンした人はどうやって戻ってきたのかということを見ていく中で、そこにヒントがあるんじゃないかと思います。

で、もう一つ、ハッ場ダムのごとも重要だと思います。町として、それぞれのある地域ごとに、しょってる歴史もだいぶ違う。それはそれで受け入れるしかないんですけども、改めてここで新しく来る人、戻って来る人、そしてここに住み続ける人、そういう人たちがみんなこの町を作っていく。で、そのためにみんなで色々考えられるような行事を大事にしていくことが重要ではないかと思います。

そういう意味では、長野原の町政要覧をこないだ拝見したんですが、そこに色々な、花火大会とか色んな行事が何回続いて、第何回目です、ということが丁寧に書かれていて、それは非常に、ある意味、地味なようにも見えるんですけど、でもそれはとっても大事なことで、ずっとみなさんが続けてこられている。で、それを楽しみに、例えば盆に帰って来るとか、色んな出て行っている人たちが戻って来るとか、そういう風なことになっているように思いました。だからこの持っている自然の豊かさ、それから文化や歴史、時間の蓄積というのか、そういうものをみなさんでちゃんと共有して、これが私たちの住んでいる長野原町らしさなのだ、長野原の良さなんだということをみんなで確認し合うことが重要じゃないかなと思います。

関口：跡見学園女子大学は、本年、町と協定、包括協定っていうんですか、色々協力関係に立っていきましようということで結ばれたわけですね。その中で何か、研究で、この町の中の研究で、あるいは今のお話も大学のノウハウもあれば、どんどん町にも生かせる部分はあるんじゃないかな、なんて勝手に思ったんですけど、いかがでしょうか。

霧：はい、跡見学園女子大学は大学の名前からもお分かりのように、女子学生しかおりません。でも、その女子学生たちが結構元気に、まじめに、勉強しています。で、私たちが思っているのは、私たち教員が長野原町で色々研究させていただく、その成果を長野原町の町づくりに生かしていただけたら、一番それが、最もオーソドックスな、正統派の地域貢献だろうと思っています。そのことは、私たちは教員のレベルではやっていこうと、今、始めています。

それと合わせて、学生と共に、ゼミの活動というか、夏休み、あるいはここは近いですから跡見からも、学生を連れて学ばせていただきにあがって、で、学生の持っている若さというか、危なっかしさも含めて、なるほどと驚くような、こんなことちょっと思いつきもしなかった、というような、そういうことを学生が持っています。で、そうい

うものをみなさんと共に、生かしていけたらというのを思っています。

私たちの研究のレベルの話で言うならば、やっぱり、例えば八ッ場ダムが、それをもとにして地域社会がこれからどんな風に新しくというか、再構築されていくのか、というようなことは、私たちがとても関心を持っていることの1つです。もちろんそれは興味本位などでは全くありません。これからどういう風に生活を再建されていくのか、ということに、興味、関心を持っています。

それから、湯かけ祭りがやっぱり、維持・再編されていく、そういう新しい形を取っているというのも聞いています。あるいは、長野原は非常に農業が盛んで後継者も、若い後継者もいて、その一方でというか、大規模ゆえの色々な課題などもある、というの若干は聞いています。そうやって農業を中心として例えば6次産業化の問題、事とか、色んなことをどういう風に考えていけばいいのか、もっと長野原の暮らしの立て方というか、生業を、基盤をしっかりとしたらよいか、というようなことも、私たちは研究テーマとしたい、というような者たちもおります。

ということでそれぞれ専門が重なっているような形の、あるいは若干違っていたりもしますが、長野原の歴史や文化を学ばせていただきながら、みなさんたちの生活に役に立つ、ほんとの意味で役に立つような、そのような研究をしたいと思っております。よろしく願いいたします。

関口：是非、よろしく願いします。さて、長野原町においてよ、って言うのは、一見、長野原町だけのエゴイズムのような、わがままのように見受けられるんですけども、でもこれは長野原町だけじゃない。東京の人たちと言いますか、都会のライフ、生活している人たちにとっても、決して地方においてよ、って言うことはイケダ先生のお話をうかがっても、マイナスでなく、社会的な公益性の、意味のあることなんじゃないかという確信はあるんですよね、そうすると、みなさんでお話うかがっていると、移住促進、どんどんアピールしていく方がいいだろう、という共通理解は確かにあるんだろうなと思います。

じゃあ、そうした時に、みなさんに順にうかがいたいんですけど、移住を考えている人、あるいはですね、受け入れる側の人、何かそういう人たちへのアドバイスとかですね、メッセージ、あの、住民の立場からの何かありましたらですね、是非、発していただきたいのですが。藤野さんからうかがいたいですが、よろしいですか、順次こちら側からおうかがいします。

藤野：はい、そうですね、アドバイスとかまだ言えるほどの立場ではないんですが、でもやっぱり、せっかく移り住んだのであれば、自分たちだけの、都会から持って来たままのスタイルで閉じこもってしまうのではなくて、地元の人の中にどんどん飛び込んで行ってみると、おもしろいんじゃないかなっていう、やっぱり、地元のおもしろいことは地元の人たちがご存知なので、そこはどんどん、あの、何でしょう、閉鎖的にならずに、北軽の人たちって、私の個人的な感想ですけど、一見、ちょっと不愛想な方たちもいたり、とかしますけど、それは何かシャイだからというか、こっちからどんどん入っていけば、全然みなさん、開いてくださる方がすごく多いので、私もすごくこっちのお父さんって呼びたくなるような、お世話になってる方とも出会えたことで、また、ここで楽しくやっていけるかなっていう、ステップが一個入ったので、やっぱりどんどんその地元の人と交流していくことは必要ではないかと思っています。

で、あとまあ、受け入れる町、町長とかにお願いするとすると、やっぱりいきなりここに住みなさいと言われても、やっぱり色々びっくりすること、通年住んでみないと、夏場だけ遊びに来ている印象で、いい所だったから住んでみたい、と思っても、また私しつこく冬のこと言ってますけど、冬の厳しさとかやっぱりあの、びっくりすることはいっぱいあると思うんですね、生活面で。なので、ちょっと1年くらい、例えばプレ滞在、みたいな、プレ移住みたいなことが家族で、まあちょっとお子さんが小さいとなかなか難しいかもしれないんですけど、ま、学校も受け入れてもらったりとか。そういうちょっと、長期の1軒お貸しして、体験ができるようなことがあれば。安心して、まあ、合う、合わないはあると思うのでそれが分かる機会になるかなという風に思ったりします。

やっぱり、私自身がそうなんですけども、子どものうちにこの北軽っていうものを見たり、体験したりしていると、すごく、あとから絶対忘れないな、っていうのがあって、子どものうちに北軽を少しでも体験しておく、また大人になって何かあそこよかったよねって思って、あの、また住んでみたい、行ってみたいと思うんじゃないかってことになると思うので、すごいこれ、長期的な話になってしまいますけれど、子どもを含めたこの魅力、体験、受け入

れというか、そういうことができれば、長い目で見ればいずれここに来たいな、って思う方が増えるんじゃないかなと思っています。

隈上：そうですね、いらっしゃってからの、移住してからのお話としてはほんとに藤野さんのおっしゃる通りだと思うんです。けども、私はそのこれから移住を考える人にお話をしたい、ま、ここにはそういう方はいらっしゃらないでしょうけど。

今日のイケダ先生のお話の中に、仕事は持って回れる、っていうお話がありまして、まあ、今インターネットが発達して色んな所で仕事が、さっきも先生、仕事されてたような感じがしましたけれども。ま、必ずしも持って回れる仕事ばかりでもないのかなあという風にも思ったりはしていますので、そのやはり、移住を志す方は今やってらっしゃるお仕事がある程度極めていただいた方がいいのかなあということ、それと、逆に今、長野原で生活されている子どもたちは、やっぱり1回、外へ出た方がいいのかなあという風に思います。それで、その時、外へ出た時に、長野原、北軽井沢ってこんなとこだよって、ちゃんと話せるような子どもに育てるといって、そういう意味での教育ですよ。それがすごく大切なのかなと思いますし、イベントごとに、お盆とかに帰ってきた時に何か、長野原、いつか帰りたいなって思えるような町を維持していくことが、大人の仕事でもあるのかなあと思います。

あとはまあ、私、移住者サラリーマンですので、できることは一生懸命、業績上げて、雇用増やして、帰って来られる方々の仕事を作っていくことが、必要なのかなという風に感じております。以上です。

山崎：えーと、逆に、長期間都会に住んだ事がない、地元生まれで、アメリカ研修は2年間、夢のように終わっちゃった出来事でしたんで、逆にその都会に対する偏見なのかもしれないですけど、例えばこっちで冬、また、冬の話になってますけど、めちゃめちゃ寒くて、大丈夫かな、水道管、凍っちゃいそう、そういう寒さの中で、でも、雪がめちゃめちゃ降っちゃって、明日、うちの前、除雪車ちゃんときてくれるかな、自分で掻くのかな、この量。みたいな不安とか、あると思うんですけど、何ですかね、次の日の朝、窓開けた時のその新雪に朝日がキラキラ当たって光ってるのは、めちゃめちゃ、きれいです。

そういう、何だろ、ことであったり、夏場その、農家で野菜を作っていますし、その、土にじかに触れたりしてて、日々、生きてることを実感する、っていうことは、ま、もちろん、都会にいて生きてることを実感してらっしゃる方大勢いらっしゃると思うんですけど、すごくこのシビアな自然、きれいなんだだけじゃなくて、時に厳しく、時に容赦のない自然に触れていることによって生きていく実感というのは、なかなか体験できないんじゃないかなって、思うんですね、都会では。結構、何もかも、お膳立てされている場所があって、限られた時間、そこでだけ、っていうことはあるにしても、日々の生活多くて、ふと気づいたらその瞬間、日常にごろごろ転がってるんですよ。まあ、そういうった中で、えーと、ここは何を話すこと、話す時だったんですけ。

関口：来たいと思う人にね、メッセージ。

山崎：今の話で大丈夫ですか。

関口：大丈夫、大丈夫。

山崎：はい、じゃ、そろそろ次にバトンを渡します。

星野：そうですね、みなさん言っておられた通り、やっぱりここは冬になると、何も無い。と、思うんですね、やっぱり。雪、雪だけ、雪と寒さだけはあるけど、ほかには何も無い。っていう地区なんで、やっぱり、一度、冬を経験していただくと、この大変さも分かるのかなと思います。それから、やっぱり、あの、移住を考えるにあたっては、やっぱり、地域の人と色々お話ししていただいて、ここにいる人たちが考えているようなことだけではなくて、もっと色んな人が、色んな北軽のいい所を知ってると思うんで、とにかく、色んな人と会ってお話をしてもらいたいなと思います。そんな感じですかね。

関口：その、イケダさんにも検討段階の人への、何か、アドバイスを、漠然とした質問で。

イケダ：そうですね、2パターンあるんですよ、それはえと、1つは多分、特に専門性がなくて、手に職、みたいなものを持ってなくて、若い子、20代前半、大学卒業したけど、フリーターになってるけど、田舎に行きたい、みたいな若者って、結構あぶれてるんですよ。そういう人たちに、ま、彼らにいつも言ってるのは、とりあえず来い、と。とりあえず来る、とりあえず来れば何とかなる、っていうことを言うと、結構何とかなるんですよ、みんな。意外

と僕らが住む地域でも、そうって今年はいっぱい来てますね、何か、若者がいっぱい、手ぶらで来てますけど、やっぱり何かみなさん、とりあえず家さえ見つけちゃえば仕事は何とでもなったりするんですよね、やっぱり周りの人たちも若い人が来ると注目しますし、で、その人がそんなに当然悪い人間じゃなければ、何かこう一緒に飲みに行く中でこう、仕事を提供するみたいなことが普通に行われるので、彼ら若い人たちも生活に、そんなにぜいたくがしくて当然来ているわけではないので、まあ、貧乏な生活をしながら、人とつながりながら仕事を心得て成長していく、みたいな形によく見えますね。で、それは別に20代に限らず多分30代ぐらいになってもそういう柔軟な精神性を持っている方だったら、特に手に職がなくてもとりあえず住んじゃえば、と。もしだめだったら1年で戻りゃいいし、ぐらいの、ま、気軽に来てみると意外と何とかなるよ、っていうのは実例ベースでもそうだなあというのは感じますね。

で、もう一つは既に高い専門性を持っている方、で、子育てをしてみたいとか、都会で限界を感じている方は、さっさと来た方がいいよ、と。で、何で来た方がいいかという、やっぱり僕が特に強調したいのは、おそらくその、収入が上がりますよ、と。もちろんそれはやり方次第なんですけど、僕は実際、インターネットベースで仕事をしているので、ま、ほとんどどこでも変わらず収益は出るし、むしろ田舎に行った方が、仕事の幅が広がる、収益が上がりました。例えばこういう場に呼んでいただけるのも、それこそ高知の田舎にいたからでしょうし、仕事の幅がぐっと広がります。で、それは僕みたいなブログを書いたり、仕事以外の全く違うジャンルの仕事でも、高い専門性を持っている方は住む場所を変えるだけでやっぱ、仕事の幅ってぐっと広がると思うんですよね。

なので、何でもいいんですけど、既に手に職を持ってる方で、特に、子育てですよ、子育てで東京で苦勞してるんだったら、さっさといい田舎見つけて移住しちゃえば、と言いますね。なので、大きく、ま、移住を検討しているのがざっと今2つ、分けましたけど、だいたいそういう言い方をして、結局まあ、とりあえず来てみれば、っていうことに尽きるような気がする。だから、行政としてはまあ、そう考えると、受け入れのために1年間くらい、先ほども話がありましたが、1年間くらい滞在できる、気軽に住める移住者向け物件みたいなのが整備されてくると、僕ら民間はもうちょっと、1年間くらい来てみようかと言いやすくなるので、そういう所でうまく連携して行政と民間とでやってけるといいのかな、って感じてますね。

関口：あとですね、ちょっと確認しておきたいんですけど、イケダさん、さっきのご講演でですね、中古物件がいいのがあった、っていうのが、お話をされていた、結構町長も気にしていると思うんですよ、まあ、高知県の、まあ、長野原専属になれ、とは言いませんけど、何かこう、ご縁ができたらすね、ああ、その、ね、そうなるといいかな、と思ったりもするんですけど。何か、ただ、その半面、今お話で冬は寒いよ、なんてお話がたくさん出たんですが、何かその辺のところはどんな。

イケダ：いえ、もう、僕は今とりあえず物件情報を進めている状態なので、安く手に入るんだったら、買っちゃおうかな、というレベルで。ま、それは僕に限らず、そう思う人は多分、いっぱいいる。で、まあ、とりあえず、ゲットできてるといいですよ。

ま、冬の寒さ云々とか、ま、僕ら、僕が住んでる高知の山奥もかなり寒くてマイナス5度、マイナス4度、5度くらいまでいって、で、まあ、ここはちょっとレベルが違うんでしょうけど、ま、いずれにせよ僕らも寒いところに住んでるんで、そんなに。ま、豪雪はちょっとやだな、とは思いますが。6メートルから雪積もられると、ちょっとどうしようもない感じがしますが、まあ、ここは多分、そうはならない。それに比べれば寒さも、ある種厳しさのジャンルが違うので、ま、うちの妻と子どもそれもいいんじゃない、って、さっき車の中で道中、していましたね。

そうそう、そうそう、寒さ、寒さって豪雪、豪雪地域の人には申し訳ないんですけど、まあ、家開けて、全部、家から出られないなんて、それに比べるとまあ、多分、ある種、マイナス20度くらいまでいくっていう寒さと厳しさのジャンルが違うので、そこは何か、そんなに厳しくないんじゃないかっていう、変な言い方ですけど、ものすごい豪雪で家から出られないよりはマシなんじゃないかな、という感じは僕ら、まあ、話を聞いていて思いました。

関口：はい、ありがとうございます。じゃあ、町長に閉めていただく前に、先生、また教授にお話をうかがいたいのですが、社会学の立場でですね、色々研究、見てきた中で、こういう移住といいますか、は、いい結果があるけども、こういうのはちょっとあまりいい結果にならない、色んな事例とかですね、そういう何かあの、知見が何か、うかがえるようでしたら、何かアドバイスといいますか、お願いできたらな、と思います。

霧：はい、えと、長野原町が人口減少っていうのは、ハッ場ダムの問題がとて大きかったと思うんですけども、でも、私がこれまで研究していた西日本っていうのは、こちらよりはるかに激しい人口減少を昭和30年代ぐらいから、経験しています。だからこそ危機感がとても高まって、っていうか早くて、対応も早かったと思うんですけど。で、そういう所で、行政もですけど民間の人たちも、民間というかその、地域に住んでいる人たちですね、イケダさんは限界集落という言葉をおっしゃいましたが、その集落の戸数はそんなに減らないんだけど、1軒1軒の規模が小さくなっていく。長男がアトトリだ、って思っていたら子どもはみんな出てしまったので、アトトリなんて言ってる場合じゃなくなってしまってるようなおうちとか、そういうのがいっぱいあるような集落が、西日本にはたくさんあります。

けれども、そういう所で、移住というかですね、Iターンの人、Iターンというのは全く縁もゆかりもない人がそこにやってくる、で、Uターンは1回出た人が戻って来る、IターンもUターンも受け入れている、増えている、成功というか、そこそこ人口が減ってはきているけど、その減り方が少しマシになったというような事例を見ていくと、何がよかったかという、先ほどもみなさんたちの報告からアイデアが色々出てきましたけど、お試しの移住みたいなことが事前に経験できた、そのことで年間を通して春はこういう良さとか色んな、季節ごとの良さや厳しさ、あるいはその土地土地の、その集落の持っている行事などを経験して、そこで行事をやっているのはもちろん人なので、そこにいる人たちと実際に触れ合っ

あ、ほんとに色々な人がいる。もちろん、意地悪な人もいますよ、変な人もいます、で、いい人ばかりじゃありません。ここにおられる方は、みなさん、いい人だと思うんですけど、そんな人たちばかりじゃないですよ。みなさん、自分の住んでいる所を見渡したら分かると思うんですけど、でも、そういう色々な、変な人も含めて色々な人がいるのが私たちの当たり前の社会なんですね。

で、しかし、そういう社会なんだけど、変な人はだんだん声小さくなるんですね。やっぱり、いい人、いいことを言う人が、の聲が大きくなってるとような集落では、やっぱり、移住する人たちはきちんとそこで定着しています。で、もうこんなやってもだめだ、とか、何ていうか、だめな理由ばかり探すような人とか、そういう人たちの声の大きい所では、やっぱりそういうところには移住はしたくない、です。そういうところに、間違っ

て移住した人たちはやっぱりどこかへ行ってしまいます。そういう風に、その集落の人たちが、どういう風な自分たちは生き方をしているか、っていうことが問われるし、それからその集落に受け入れる場合でも、もうとにかく、人口増えれば何でも、誰でもいいんだ、っていうような受け入れでは絶対、失敗しています。というのは、変な人も来ますし、興味本位で来る人もいるし、単に何か大きな幻想を抱いてなんかやって来て、その集落をひっかきまわして帰ってしまうような人とか。ま、色々な人がいます、で、そういう人たちをちゃんと見極めるっていうことも重要だ、ということを私がこれまで色々話を聞いた、調査をした村々の人たちはそういうことを言っています。

したがって、誰でもいいんだ、っていう受け入れは、絶対やめた方がいいですし、集落の人たちと新しく移住を希望し、考えてるような人はやっぱりしっかり話をして、色んなところで触れ合っ

て、その上でお互い納得して、来てほしい、あるいは行きたい、いう風に決める。そのぐらい慎重に、丁寧にやっていった方が、結局はお互いのため、というようなことを色々な所で聞いていますので、ご紹介します。関口：ありがとうございます。そろそろですね、お時間が近づいてきたものですから、最後に町長にお話をいただいて、この会を閉めたいと思います。今のお話、ちょっとした仕掛けで暫定的に入ってみたりとか、猶予期間とか、あるいは地元の人と交流する機会とか、あるいは受け入れる側の今のお話のように、モラリティとか、そういったものも必要です。色々なお話が出ました、今後の町政展開する中でどんな風な感想をお持ちなのか、色々お話し

かしたいと思います。町長：えー、藤野さんからも、先生からも出ましたけれども、プレ体験をできるような場をという注文がありましたけれども、まさに長野原町が、田舎暮らしを体験できる町、という風に打ち出してですね、プレ体験をできる町を実践していったらどうか今はほんとに、真剣に思ってるんですけども、それにはま、イケダ先生も言いましたけれども、北軽井沢、3000軒ぐらいあるであろう別荘地を活用することが大きなポイントになってくるんだろうなと思っ

おります。それと、うーん、ま、パネリストのみなさんはアドバイスという形で言われたんですけども、発信力を高めるといふ観点から逆に、私からパネリストのみなさんへちょっとお願いというか、で、閉めたいと思っているんですが。

まずは、藤野さんと隈上さん、移住してきた人として僕はここからこうやって移住してきて、こうやって生活を送って、これだけ幸せなんだ、ということのを是非とも、友人知人、あるいはSNSで発信していただきたいな、と思っています。

で、地元の山崎さん、星野さんに対しましては、やっぱりまずは地元住民がその地域愛を高めなくちゃいけないんだと思います。自分たちここがほんとにいいものなんだ、ってことを再認識しなくちゃいけないもんだと思っています。でも、お二人はもう、少なくとも北軽井沢、応桑のことを愛してる人たちなんで、どういう部分が、どれだけ好きなんだ、ってことを発信していただきたい、という風に思います。

そして、鶴先生に関しては、せっかくあの、協定結んだんですから、女子大生をたくさん連れて来て、長野原町を体験させていただきたい、それをお願いします。

それとイケダ先生、に関しては、これはもうほんとに心からのお願いなんですけど、ブログでもSNSでもいいんで、長野原町、北軽井沢のことを連呼していただきたいと思います。それとちょっと、僕よく理解していなかったんですけど、例えばイケダ先生が話を聞いて紹介した人が、自治体が行っている空き家バンクの家に、家を買って移住したら、自治体からお金が入る、っていう商売はどうでしょうか。ははは、長野原町、お金払いますんで。即答、思いました。そして最後に、関口さん、コーディネーターほんとにありがとうございました。で、群馬県35市町村ありますけども、ちょっと下駄を履かせておまけして、長野原町の記事をこれからもよろしく願い申し上げます。以上でございます。

関口：あの、以上で時間がまいりました。実はこのシンポジウム、出席者のみなさんに、こういう、大まかにこういう質問をしますよ、ということだけはお伝えしたんですけど、どういう回答が出てくるか、全然予想だにしないで、極めて不安な部分もあったんですけど、みなさんのほんとに日頃の活動を支えにしたご発言ができて、うまく発酵して、最後は町長の素晴らしいメッセージで何か、エンディングを迎えたなど、そういうことの影響でございます。そんなことで、シンポジウムは終わりにします。パネリストのみなさんに、是非、大きな拍手を送ってください、よろしく願いいたします。

司会：パネリストのみなさま、どうもありがとうございました。そして、ご来場のみなさま、ご清聴いただき、まことにありがとうございました。最後に、主催者を代表いたしまして、萩原町長より、閉会とお礼の挨拶をさせていただきます。

町長：みなさん、長時間おつきあい下さいまして、ほんとにありがとうございました。何かしらヒントなり、何なり、掴むことができていただけたらうれしいなと思います。お手元にある「フューチャーはネイチャーの中にある」というサブタイトルがあるんですけども、それは実は私の言葉ではありませんで、私がいへん尊敬している先輩の言葉を今回のフォーラムで使わせてもらったんですけども、何かよく意味が分かんない部分もあるんですけども、そうなのかもしれないなあっていう部分もありまして、今思うのは、ほんとにフューチャーはこの北軽井沢のネイチャーの中にあるのかってことを、みなさんと共にこれから確認していきたいと思っておりますので、是非ともこれからもよろしく願い申し上げたいと思います。ほんとに、ご清聴、ありがとうございました。

司会：以上をもちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。本日の様子は、明日28日の「上毛新聞」で特集いたしますので、是非、ご覧ください。